

# 二格相当の無助詞名詞句について

石田 尊

キーワード：格助詞脱落現象、助詞の無形化、[着点]、[存在点]、目的、統語構造

## 要 旨

本稿は、二格名詞句に相当するような無助詞名詞句について、その分布、分類、そしてその生起に関する文法的な条件の三点にわたって考察を行うことを主眼とする。1. 節ではまず基本的な記述を行いつつ、主体移動動詞の[着点]、「いる」「居る」等の状態動詞の文で、その文が主体の意志に基づく滞在を表す場合の[存在点]、そして対象位置変化あるいは対象移動動詞の[着点]といった、三つのケースに無助詞形式が見られるという分布を明らかにする。2. 節ではそれらの比較や分類を行い、二格相当の無助詞名詞句を、無助詞の他動詞目的語の場合と類した生起条件の想定できるものと、それができず[着点]の名詞句特有の無助詞形式と考えられるものの二つに大きく分類する。つづいて3. 節で、それらの無助詞名詞句の生起条件について考察し、それが統語論の領域に位置づけられるべきものであることについて述べる。最後の4. 節では、目的を表すとされる要素について取り上げ、それが3. 節までで取り上げる無助詞名詞句とは大きく性格が異なり、別の観点からの記述、説明が必要と考えられるものであることを示す。

## 0. はじめに

現代日本語では、特に口頭での会話などにおいて、一切の助詞を伴わない名詞句が現れることがある。こうした場合のうち述語の格成分として現れる名詞句については、ガ格相当のもの、ヲ格相当のもの、そして二格相当のものの存在が指摘されてきた。以下の例(1)～(3)において下線で示す名詞句のようなものがそれにあたる。

- (1) あれ、テレビつかないよ。(ガ格相当)
- (2) 今日は外で夕飯食べようか?(ヲ格相当)
- (3) 早く学校行かないと遅刻だよ。(二格相当)<sup>\*)</sup>

一般に名詞句がこうした無助詞の形式をとる際の文法的な条件については、すでに多くの先行研究が言及している。しかしそのような条件が、文法論上のどういった領域に位置づけられるものなのかという問題については、見解は一致していない。さらに言えば、名詞句が無助詞で現れることが、個々の助詞の特性に基づくものであるのか、その名詞句と述

語との文法的な関係に基づくものであるのかということに関しても統一した見解はない。

たとえば村木(1991:144-147)では、名詞句の無助詞形式での現れは文の骨格を作る文法格の助詞の一特性としてみなされる。一方丸山(1995)では、述語の結合価パターンと無助詞名詞句の現れとの関わりが取り上げられ、述語からの要求度が最も高いと考えられるヲ格名詞句が無助詞形式で現れることが多いこと、それ以外の格成分では、述語の結合価パターンの後ろの方に記述されている格成分(内項)であることが多いことが述べられている。また、西垣内(1992:44-46)では、無助詞形式が許される条件に関して特定の格助詞の関与を否定し、格を付与する述語による統率やそうした述語との隣接など、名詞句と述語との統語構造上の位置関係に重きを置いた分析がなされる<sup>2)</sup>。

本稿は、無助詞名詞句全般に関する先行研究のこうした言及を踏まえた上で、まず、二格相当と解釈される無助詞名詞句に関して、その分布を確定しつつ基本的な記述を行う。つづいてそうした無助詞名詞句を幾つかのタイプに分類する。その後、問題の名詞句の現れを規定する条件について本稿の提案を示す。

なお本稿では、二格相当と考えられるような無助詞名詞句の生起に関わる条件と、二格名詞句の生起条件とは別のものであると捉え、二つの条件の間に直接の関係を想定しない。したがって、二つの条件を満たす名詞句、たとえば無助詞名詞句の生起条件を満たすような文法的特性を備えた二格名詞句の存在が指摘されたとしても、それは、本稿の立場からは、二格名詞句の生起条件と二格相当の無助詞名詞句の生起条件の重なりとして説明されることになる。

## 1. 二格相当の無助詞名詞句の分布

本節では、二格名詞句を大まかにガ格と二格の二項型の文に現れるもの、ガ格・二格とヲ格をとる三項型の文に現れるもの、受動文や使役文などヴォイスとの関わりの中で現れるものの三つに分けて考察を進め、その分類ごとに無助詞名詞句の現れ、分布を記述する。なお、丸山(1995)では目的を表す無助詞形式の存在が指摘されている。この要素については4.節で別に取り上げ、検討を加える。

### 1.1. 二項型の文と二格相当の無助詞名詞句

丹羽(1989:43)では、無助詞名詞句について、「[に]」で可能なのは様々な「[に]」のうちの一部であり、多くは「行く」「来る」「入る」「着く」などの補語として着点を表す場合である。(中略)これ以外の「[に]」で「 $\phi$ 」が可能なものは多くない。」と述べられ、以下のような例が掲げられている(本稿でも丹羽(1989)と同様に無助詞形式を「 $\phi$ 」で表記する)。

(4) どこ  $\phi$  行くの? — 学校  $\phi$  行くの。

- (5) いつ京都  $\phi$  来たの?  
 (6) ちょっと中  $\phi$  入って。  
 (7) もう東京  $\phi$  着いたって。

この指摘は、上記のような(主体)移動動詞の項で、[着点]の意味役割の名詞句の中には、無助詞形式での現れの可能なものがあることを述べるものである。丸山(1995)においても同様に、ガ格と二格をとる移動動詞の[着点](丸山(1995)の術語では「到達点」)の名詞句に無助詞形式での現れが多く見られることが報告されている。

一方で、ガ格と二格の現れる二項型の文でも以下のような場合においては無助詞名詞句の現れることがない。

- (8) \*お父さんはね、お前のやつれぶり  $\phi$  驚いただけだよ。  
 (9) \*これくらい地震  $\phi$  慌ててるようじゃ、震度5とか来たらどうするのよ。  
 (10) ??~\*ぼやぼやしてないで、さっさと掃除  $\phi$  とりかかって下さいよ。

(8)(9)は、典型的には心理動詞構文に現れる[起因]<sup>43</sup>の意味役割の名詞句を無助詞形式で表そうとしたものであり、(10)は[目標]の意味役割を持つとされるものを無助詞形式で表そうとしたものである。移動動詞の[着点]の場合と異なり無助詞形式ではほぼ許容されず、「に」を伴った形で現れる。

また次のような二項型の文においても、二格相当の無助詞名詞句は不可能である。

- (11) \*そういうことでしたら僕、明日鈴木さん  $\phi$  会いますので、伝えておきますよ。  
 (12) \*こないだね、野良犬が鈴木さん  $\phi$  噛みついて大騒ぎになったんだよ。

これらの例で無助詞形式で表そうとした名詞句は[相手]の意味役割を表すものと考えられる。ヒト・モノ・コトといった名詞の素性から見た場合、この例に限らず、ヒト素性を持つ名詞の二格名詞句に相当するような無助詞形式は見られない。

二項型の文では、上記のようなものの他に[存在点]の二格名詞句に相当する無助詞名詞句の現れるものがある。

- (13)a. ああ鈴木君、明日うち  $\phi$  いる? ちょっと渡したいものがあるんだけど。  
       b. しばらく研究室  $\phi$  いるから、用があつたら呼びに来て。  
 (14) お前いつまでおれんち  $\phi$  居座るつもりだよ。  
 (15) じゃあ、今夜は繁のどこ  $\phi$  泊まってくよ。

こうした例で興味深いのは、(16)や(17)で見られるように、主体の意志に基づく滞在を文が表している場合には無助詞形式の許容度が高いが、存在や生息といった内容を文が表す場合には無助詞形式の許容度が落ちるということである。

- (16) a. それでいつまでアメリカ  $\phi$  いるの?  
b. ??オオカミってアフリカ  $\phi$  いるの?  
(17) a. 太郎君で大きいうち  $\phi$  住んでるんだね。  
b. ??ゾウガメはガラパゴス諸島  $\phi$  住んでるんだよ。

つづいて、以下のような主体の意志の関与しない例を取り上げる。

- (18) a. この辺  $\phi$  郵便局  $\phi$  ありますか?  
b. この階  $\phi$  公衆電話  $\phi$  ありましたっけ。

この(18)は、明らかに主体の意志は関与しないが、[存在点]を表す無助詞名詞句が現れているように見える。この点で、先ほど見た(13)～(17)のようなケースと矛盾するものとも考えられる。これらはしかし、(19)のように文頭から述語に近い位置に語順を移す操作を嫌うこと、また(20)で見られるように主題の現れている文では無助詞形式をとりにくいことなどから、無助詞の主題と考えられる。

- (19) ??郵便局  $\phi$  この辺  $\phi$  ありますか?  
(20) ??公衆電話は下の階  $\phi$  あったと思うよ。

以上から[存在点]の無助詞名詞句に関しては、主体の意志に基づく滞在を表す文の[存在点]のみに無助詞形式が可能であると言うことができる。なお、こうした主体の意志との関わりそのものが、名詞句の無助詞形式での現れを左右する直接的な条件となるのか否かという問題については、2.節以降考察を加える。

## 1.2. 三項型の文と二格相当の無助詞名詞句<sup>4)</sup>

以下の例を見られたい。

- (21) お兄ちゃん、お茶碗  $\phi$  食器棚  $\phi$  しまうの手伝ってよ。  
(22) 太郎君、生ゴミ  $\phi$  裏庭  $\phi$  埋めるの手伝って。  
(23) お父さん、くるま  $\phi$  車庫  $\phi$  入れるのって難しいねえ。  
(24) でね、電車が混んでたからカバン  $\phi$  網棚  $\phi$  載せようとしたんだけど。

これらの例は、ガ格、ヲ格、そして二格をとる文で、ヲ格相当と二格相当の無助詞名詞句が現れている例であり、下線で示した名詞句が二格相当の無助詞名詞句である。こうした例は話者により文法性の判断にゆれが見られるが、しかし、次に示すような文における無助詞名詞句の場合と比べると明らかに許容度が高いとみなすことができる。

- (25) \*太郎のやつが花子  $\phi$  プレゼント  $\phi$  贈ったの知ってる？  
 (26) \*あの女がお前  $\phi$  紙袋を渡すの  $\phi$  見たという人がいるんだよ。  
 (27) \*太郎のやつが花子  $\phi$  チョコレート  $\phi$  もらったの知ってる？  
 (28) \*俺があいつ  $\phi$  聞いたのはそれだけだよ。

では、以上の二グループの異なりを見ていこう。

まず、ヒト・モノ・コトといった名詞の素性としては、(21)～(24)ではすべてモノ素性の名詞が現れている。(25)～(28)ではそれとは対照的に、全てヒト素性の名詞である。二項型に関する記述でも指摘しておいたように、こうした対象移動、対象位置変化<sup>45</sup>の三項型の文でもヒト素性の名詞の二格名詞句に相当するような無助詞形式は見られない。

語順、特にヲ格相当の無助詞名詞句と二格のそれとの位置関係に関しても、両者は異なりを見せる。二格相当の名詞句に無助詞形式の可能な前者の用例群では、最も自然な語順は「ヲ格相当－二格相当」の場合である。以下の例と(21)～(24)を比較されたい。

- (29) ?お兄ちゃん、食器棚  $\phi$  お茶碗  $\phi$  しまうの手伝ってよ。  
 (30) ?太郎君、裏庭  $\phi$  生ゴミ  $\phi$  埋めるの手伝って。  
 (31) ?お父さん、車庫  $\phi$  くるま  $\phi$  入れるのって難しいねえ。  
 (32) ?でね、電車が混んでたから網棚  $\phi$  カバン  $\phi$  載せようとしたんだけど。

一方無助詞形式の許されない後者の用例群では、最も基本的で自然であると思われる語順は「二格－ヲ格相当」の場合であり、逆の語順にした(33)(34)各b.の場合では、文の許容度が僅かに下がるか、元の語順の場合にはなかったニュアンス、たとえば二格名詞句に関する談話法的な強調の意味合いが生じると考えられる。

- (33)a. 太郎のやつが花子にプレゼント  $\phi$  贈ったの知ってる？  
       b. (?) 太郎のやつがプレゼント  $\phi$  花子に贈ったの知ってる？  
 (34)a. 太郎のやつが花子にチョコレート  $\phi$  もらったの知ってる？  
       b. (?) 太郎のやつがチョコレート  $\phi$  花子にもらったの知ってる？

このような二格名詞句あるいは二格相当の無助詞名詞句とヲ格名詞句との語順に関し

て、三宅(1996a:98-97)では興味深い見解が示されている。三宅(同箇所)では、影山(1993)の「S構造複合語」に関する記述に基づき、単純な[着点]と被影響者としての[着点]の生起する位置が異なっていることが示されている。三宅氏の示される両者の統語構造は以下のようなものである。

(35) 単純な[着点]

[vp 裁判官 [v 少年 [v 少年院 送(る)]]]

(裁判官は少年を少年院に送った)

(36) 被影響者としての[着点]

[vp 会長 [v 入賞者 [v 記念品 贈(る)]]]

(会長は入賞者に記念品を贈った)

本稿にとって重要な点は、三宅氏のこの構造では、単純な[着点]はヲ格名詞句よりも述語に近い位置に現れるとされていることである。無助詞形式の可能なものがヲ格相当の無助詞名詞句よりも内側、述語よりの位置を基本語順とするという特徴を持つことを指摘した、本稿のここでの記述と、上記の三宅氏の見解との間の共通性は明らかである。

以上から三項型の文のうち二格相当無助詞名詞句の生起が可能なのは、「ヲ格相当—二格相当」という基本語順をとるものであり、逆の語順を基本とする文では無助詞形式の許されないことが明らかになった。

名詞句の表す意味役割という観点からは、対象の位置変化あるいは移動の[着点]を表すものが無助詞形式化を許し、典型的な[着点]を表さない(37)のようなもの、対象の位置変化・移動を表すか否かに関わらず[相手]の意味役割と解される(25)~(28)、(38)のようなものは無助詞形式化が許されないということが言える。

(37)a. \*蒸らす前にお饅頭 $\phi$  タオル $\phi$  くるむの忘れないでね。

b. 蒸らす前にお饅頭をタオル|で|に|くるむの忘れないでね。

(38) \*太郎、花子ちゃん $\phi$  旅行の写真 $\phi$  見せたら？

(37)の「タオル」は、対象(「お饅頭」)の位置変化の[着点]として捉えられなくもないが、「に」-「で」交替を起こすことから示唆されるように、むしろ[道具]の意味役割として捉えられると言える。このようにモノ名詞であっても典型的な[着点]を表さないものの場合、二格名詞句の無助詞形式化で現れることができない。また(38)は、具体的な位置変化、移動の関わらない文における[相手]の例だが、やはり無助詞形式での現れは見られない。

### 1.3. ヴォイスと関わる二格名詞句と無助詞名詞句

受動文や使役文においては、対応する無標の文の主語に相当する名詞句が二格名詞句として現れる場合がある。

(39) 太郎のやつ、先生にひどく怒られたらしいぜ。

(40) うちの子供にピアノ習わせようかと思ってるんだけど。

こうした名詞句は、(41)(42)であきらかなように、無助詞形式で現れることができない。また、使役文においては、(43)のように対応する無標の文の主語にあたる名詞句が無助詞形式で現れることがあるが、これは二格相当ではなくヲ格相当の無助詞名詞句であると考えられる。

(41) \*太郎のやつ、先生  $\phi$  ひどく怒られたらしいぜ。

(42) うちの子供 |\*  $\phi$  / \* を / に | ピアノ習わせようかと思ってるんだけど。

(43) これからそちらへですね、うちの鈴木 |  $\phi$  / を / に | 向かわせますんで。

### 1.4. 記述のまとめ

本節で見てきたことをまとめると、二格相当の無助詞名詞句が、「行く」「来る」等の移動動詞の第二項([着点])の場合、「いる」「居座る」等の状態動詞のつくる文で、主体の意志に基づく滞在を表す場合における第二項([存在点])の場合、そして「しまう」「入れる」等の対象位置変化/対象移動動詞の第三項で、[相手]でも[道具]的なものでもない、単純かつ典型的な[着点]を表す場合に現れることが明らかになった。これらが二格相当の無助詞名詞句の分布ということになる。

また、名詞がヒト素性のものである場合無助詞形式が許されないことや、意味役割や基本語順が、何らかのかたちで無助詞形式の成否と関わりを持っていることも記述の中で触れた。これらのことと二格相当無助詞名詞句の生起条件との関係については、3.節で取り上げる。

## 2. 各タイプの比較と分類

二格相当と考えられる無助詞名詞句の分布は1.節において明らかになった。本節ではそれらの比較と分類を行う。

まず、前節と多少順序は前後するが、1.1.節後半で見た、主体の意志が関わる滞在の文の[存在点]の場合から考察を始める。以下に例を再掲する。

- (44) a. ああ鈴木君、明日うち  $\phi$  いる？ちょっと渡したいものがあるんだけど。  
b. しばらく研究室  $\phi$  いるから、用があつたら呼びに来て。  
(45) お前いつまでおれんち  $\phi$  居座るつもりだよ。  
(46) じゃあ、今夜は繁のとこ  $\phi$  泊まってくよ。

これらは、主体の意志の有無が無助詞名詞句の成否と関与しているという点で、三宅(1996b)の、[起点]の対格標示に関する議論との並行性を見ることが出来る。三宅(1996b)から例を借りる(判定も三宅氏のものに従う)。

- (47) a. 太郎が部屋を出た。  
b. \*煙が煙突を出た。

こうした例の文法性の違いについて、三宅(1996b:144-146)では「意志的にコントロールされない移動の場合は、[起点]は対格で標示できない。」という一般化が示され、またいわゆる「Burzioの一般化」(Burzio1986)<sup>6</sup>を支持する現象であると述べられている。本稿の関心から上記の三宅氏による一般化を読み替えると、「出る」という動詞は一種の自他同形動詞であり、その移動を主体が意志的にコントロールするかどうかで、文が対格の目的語を持つ他動詞文の構造をとるか、それとも対格の目的語を持たない(非対格)自動詞文の構造をとるかが定まるといことになると考えられる。

こうした移動動詞の対格標示と、[存在点]を表す二格相当無助詞名詞句の生起という現象とは、想定される格形式の異なりをはじめとして全同ではない。しかし本稿は、「いる」を一種の自他同形動詞とみなし、また「居座る」等を一種の他動詞とみなした議論が可能であると考ええる。つまり、主体が意志的にコントロールしていない「存在」の場合は、文が非対格自動詞文的な構造をとるが、意志的にコントロールされる「滞在」の場合には文が他動詞文的な構造をとり、[存在点]の名詞句が目的語的な地位を持つとまず考えたいのである。そしてこの発想と、他動詞の目的語がしばしば無助詞形式で現れるという事実の二つを前提として考えると、主体の意志的なコントロールが認められ、他動詞文的な構造をとる文において[存在点]の名詞句は目的語的な地位を有し、またそのことによりそれが無助詞形式で現れる条件が整う、という説明が導かれることになる<sup>7</sup>。またその条件とは、他動詞文目的語が無助詞形式で現れる条件と変わらないか、かなり近似したものであると考えられる。

さて、[存在点]を表す無助詞名詞句のある種「他動詞目的語相当」とも言えるような上記の特徴は、他の二格相当無助詞名詞句との異なりや共通性を考える上で重要である。たとえば1.2.で取り上げた対象の位置変化/移動の[着点]を表す無助詞名詞句は、そもそも他動詞目的語が文内に共起するものであるため、[存在点]の無助詞名詞句とは区別した扱



いが妥当である。また1.1.前半部で取り上げた主体移動動詞の[着点]については、皆主体に意志を想定できる例を挙げておいたが((4)~(7)参照)、以下のように主体の意志の想定できない「ガ格—二格相当」型の文も存在する\*8。

(48) 先生、ボールがドブ $\phi$ はまっちゃいました。

(49) 前のトラックのはねた石がフロントガラス $\phi$ あたってさあ、いきなり。

このように二格相当の無助詞名詞句には、他動詞文的な文構造を前提とするものと、そうした文構造を前提としないにも関わらず許容されるものとの二つがあると考えられる。前者は無助詞の他動詞目的語の生起条件と同じかそれに近い条件が想定できるものであり、後者はそうした条件の想定ができず、現状では[着点]の名詞句に特有の無助詞形式とみなすよりほかないと考えられるものである。本稿はこの観点から二格相当無助詞名詞句を分類する。

#### (50) 二格相当無助詞名詞句の分類

a. 無助詞の他動詞目的語の場合に類した生起条件の想定できるもの

(i) 主体の意志に基づく滞在の[存在点]

(ii) 意志を持つ主体の移動の[着点]

b. [着点]の名詞句特有の無助詞形式と考えられるもの

(i) 対象位置変化/移動の[着点]

(ii) 意志を持たない主体の移動の[着点]

この分類ですぐさま問題となってくるのは、a. (ii)の扱いであろう。a. (ii)は[着点]であり、b. のタイプに分類される可能性も現状では否定できない。しかし、これは次節の議論の先取りとなるが、二格相当の無助詞名詞句の成否にとって最も重要なのは意味役割ではなく、したがって同一の意味役割として扱われている名詞句が別のタイプに分断されることも起こり得るとしておく。

またこの分類は、いったいどのような条件、基準で無助詞形式が許されるのか、その生起条件の内容については直接何も語っていない。上記の分類が妥当なものとなるためには、こうした無助詞名詞句の生起条件がこの分類と矛盾しないことが明らかになるのを待たねばならない。

### 3. 二格相当の無助詞名詞句の生起条件

本節では、二格相当無助詞名詞句が現れる際の文法的な条件について考察を行う。特に

問題とするのは、そうした条件がいったい文法論上のどの領域に位置付けられるべきものであるのかという点である。

村木(1991:144-146)では、二格相当の無助詞名詞句の存在を、「に」が文法格であることの根拠の一つとしている。しかし実際に村木(同箇所)が文法格としているのは与格(本稿で[相手]の意味役割を表すものとして扱ってきたもの)の方であり、[存在点]や[着点]を表す位格(場所格)の二格名詞句は「広義の場所格」のメンバーとされ文法格からははずされている。与格を位格よりも文法的に主要な項としてみなすこの種の立場は村木(1991)に限ってみられるものではなく、また「太郎にやった」「太郎にもらった」のように[着点]的な場合でも[起点]的な場合でも同じく与格として現れることを考えれば、文法格としての認定が下されることも頷ける。

こうしたことから考えると、無助詞名詞句が文法的に主要な文法格あるいは構造格の名詞句を中心に分布しているとする素朴な一般化には反例があることになる。相対的な言い方となるが、位格に比してより文法格/構造格らしい与格は無助詞形式をとらず、反対に与格よりは文法格/構造格的ではないとも言える位格が無助詞形式をとるということになるのである。

以上からその名詞句が文内に生起することの予測のしやすさ、そして文法的な主要度、重要度を二格相当無助詞名詞句の生起条件とする立場には問題があることになる。では意味役割は問題の無助詞名詞句の生起条件となり得るだろうか。

仮に意味役割を無助詞名詞句の生起条件としようとした場合には、[存在点]と[着点]とを含むような概念を設定した上で、同時に主体の意志を前提としない[存在点]を排除するような意味役割を設定することが必要となる。その際[存在点]は、無助詞形式化の不可能な[存在点]と可能な[滞在点]といった具合に分断されることが予測されるが、これは意味役割の理論にとって建設的なやり方であるとは思われない。したがって特定の意味役割を表すことを二格相当無助詞名詞句の生起条件とみなすことにも問題があることになる。

[存在点]を表す名詞句は、しばしば主格名詞句よりも動詞から離れた位置に現れる。

(51) つくば市に高エネルギー研究所というのがある。

しかし、本稿ですすでに見てきた無助詞形式の[存在点]は主格よりも動詞に近い位置を基本語順としている。

(52)a. そう言えば太郎君がうち $\phi$ 泊まるのって初めてだよな?

b. ??そう言えばうち $\phi$ 太郎君が泊まるのって初めてだよな?

(50)b. (i)に分類された対象位置変化や対象移動の[着点]も、動詞に近い位置、厳密に言

えば目的語よりも動詞に近い位置を基本語順とすることはすでに1.節の中で触れた。その他の二格相当無助詞名詞句も、動詞直前の位置を基本語順とすると考えることに問題はなく、二格相当無助詞名詞句全体の共通した特徴として、西垣内(1992)の述べるような述語との隣接を考えることに問題はない。

以上からすると、二格相当の無助詞名詞句の生起条件とは、動詞の直前という統語環境に現れることの約束されているもののみが共通して有している何らかの文法的な特性である可能性が高い<sup>9)</sup>。したがって本稿では、現時点での提案として、本節で問題としてきた条件とは基本的には統語論という領域の中に位置づけられるものと考ええる。

1.節では、ヒト素性の名詞の場合無助詞形式が許されないことについても触れた。この、ヒト素性の名詞でないこと、という特徴は二格相当の無助詞名詞句全体にかなり明確に見られる特徴である。しかしこれを生起条件あるいはそれと密接に関わるものとしてみなすと、(29)～(32)の例や(52)で見られるような、無助詞名詞句を動詞から遠ざける操作によって文法性が低下するという、すでに見てきたような現象をうまく説明することができない。語順はどうであろうと名詞の素性は変わらないはずだからである。

また、ヒト素性の名詞であり[相手]の意味役割を表すような名詞句に無助詞形式の許されないことについては、すでに引用した三宅(1996a)の、単純な[着点]と被影響者としての[着点]の統語構造の差異に関する議論のように、そうしたヒト素性の名詞句と無助詞形式の可能な名詞句とは、異なった統語環境に現れているとする議論の導ける可能性がある。したがって二格相当の無助詞名詞句の生起条件に関する限り、それを統語論という領域に位置づけることを阻むような要因は今のところ見当たらない。

このような位置づけは、無助詞名詞句一般の生起条件を、述語からの抽象格の付与という統語論的な観点から記述、説明するKuroda(1988)、西垣内(1992)、金水(1993)、三原(1994)等の立場と基本的に変わらない。しかしまた、二格相当の無助詞名詞句は二格相当であるが故に、動詞からの「対格」付与による名詞句の機能の認可、保証にその生起条件を求めにくい点がある。(50)a.のタイプの無助詞形式は意志を持つ主体の存在を前提としており、その現れは、基本的にBurzioの一般化に従う現象であると言うことの可能なものである。したがって、注7でも若干触れたように、対格付与による名詞句の機能の認可がなされた場合に無助詞形式が許される、といった条件を立てる発想の余地がある。

しかし(50)b.の[着点]特有の無助詞形式と考えられるタイプは、意志を持つ主体の存在は前提されないか(b. (ii))、そうした主体が共起する場合(b. (i))でも対格は別の名詞句に与えられている。このような場合では、対格の付与を無助詞名詞句の生起条件とするような発想の余地はなく、無助詞形式のまま名詞句の機能が保証されることを説明する新たな道具立てが求められなければならない。この道具立ての候補としては、外項となる[動作主]を表す名詞句を持たないにも関わらず、対格を標示することの可能な[経路]の構文に対して、三宅(1996b)の仮定した、動詞の姉妹位置にさらにVP(動詞句)が現れるいわゆる

VP-shell構造(Larson1988等参照)<sup>\*10</sup>の適用などが考えられるが、詳細は別稿に委ねたい。

#### 4. 目的を表す要素について

本稿最後の課題として、丸山(1995)の指摘する目的を表す要素について取り上げる。丸山(1995:373)から例を借りる。

- (53)a. 食事 $\phi$ 行くお店いろいろ探したんですねー。
- b. 志賀の方へスキー $\phi$ 行くんですが、……

この他にも、目的を表しかつ「に」を伴わないものには以下のようなものが考えられる。

- (54)a. ちょっとお隣 $\phi$ 挨拶 $\phi$ 行ってくるね。
- b. 花子のとこ $\phi$ 面会 $\phi$ 行ってこなくちゃね。

これらは、丸山(1995:373)の記述ではact(行為)の意味素性を持つとされるものである。

目的の名詞句は、明らかに述語(ここでは「行く」「来る」等)の必須項であるとは考えにくく、たとえば和氣(1996)が指摘するように、[相手]や[着点]等の構造格的な二格名詞句と比べ、より副詞的な成分であると考えられる。こうした要素が「に」を伴わずに現れることは、名詞句が無助詞形式をとるか否かで構造格の名詞句であるか意味格の名詞句であるかを区別しようとする幾つかの先行研究にとっては大きな反例となりかねない。このことに関して以下考察を加える。

- (55)a. 明日病院に花子の見舞いに行ってくるから、お昼は一人で食べてね。
- b. 明日病院に花子を見舞いに行ってくるから、お昼は一人で食べてね。
- c. 明日花子を見舞いに病院に行ってくるから、お昼は一人で食べてね。

(55)a. の下線部は、それ全体で目的を表していると考えられるが、b. c. の下線部にはヲ格名詞句が現れている。このヲ格が「行く」に由来するものでないことは、「花子を行く」といった文が不可能であることから明らかであり、「花子を」は「見舞いに」の項であると考えられる。

また、次のような例も目的を表す名詞句とされる要素が項をとることを示している。

- (56) 今日学校にね、担任の先生に挨拶に行っただよ。

(56)では、「行く」の[着点]である「学校に」の他に、「挨拶に」の項として「担任の先生に」という二格名詞句が現れている。(55)ではヲ格名詞句を項としてとり、(56)では二格をとるのは、そもそも目的を表すとされる要素が「花子を見舞う」「先生に挨拶する」のように動詞として現れた場合と同様の項構造あるいは格体制を維持していることを表している<sup>\*11</sup>。

無助詞形式の場合でも、同様にそれ自体が項を要求することを確認しておこう<sup>\*12</sup>。

(57) 花子に面会  $\phi$  行ってきたよ。(「\*花子に行く」)

(58) おい、これからあびす屋にウナギ  $\phi$  食べ  $\phi$  行こうぜ。(「\*ウナギ  $\phi$  行く」)

こうしたことから本稿は、目的と呼ばれる要素は述語としての性格を色濃く持ったものと見る。こうした要素に現れる「に」について、それをそのまま格助詞として認定することに問題があることは明らかであり、格助詞の無形化/脱落現象の一つとして目的の場合を含めることはできないと考える。目的を表す要素は3.節までで見た無助詞名詞句とは大きく文法的な性格が異なっているのである。

以上からすると、こうしたケースにおける「に」とその「無形化」が、幾つかの先行研究の示す無助詞名詞句一般に対する見解と一致しないのは当然のことと言える。本稿としても、目的を表しかつ「に」を伴わない要素を前節までの無助詞名詞句とひとまとめに扱うということは避け、こうした「に」に関するさらなる考察、並びにその無形化の条件については今後の課題とする。

## 5. おわりに

本稿は二格相当の無助詞名詞句について、その分布(1.節)、分類(2.節)、そしてその生起に関する文法的な条件(3.節)の3点に渡って考察を行った。また、4.節においては目的を表すとされる「に」を伴わない要素について考察を行い、3.節までで取り上げた無助詞名詞句とは別の扱いが妥当と考えられることを示した。

二格相当の無助詞名詞句の分布に関しては、主体移動動詞の[着点]を表す名詞句、主体の意志的な滞在を表す文の[存在点]の名詞句、そして対象位置変化/対象移動の文の[着点]を表す名詞句において無助詞形式の名詞句が現れることが明らかになった。その結果に基づき、二格相当の無助詞名詞句を、a. 無助詞の他動詞目的語に類する生起条件の考えられるものと、b. [着点]の名詞句特有の無助詞形式と考えられるものの二つに大別した。無助詞名詞句の生起条件に関しては、a. b. どちらのタイプともそれが統語論の領域に位置づけられると考えられることを示し、a. のタイプに関しては他動詞の目的語の場合と同様、動詞からの対格付与をその生起条件とする発想の可能性を指摘、またb. のタイプに関しては、

その生起条件を記述するには新たな道具立てが必要なることを示した。

最終的に以上のような二格相当無助詞名詞句の生起条件を具体的に記述することは本稿では実現しなかった。ただし少なくとも、そうした生起条件が統語論の問題として捉えられるという主張は為し得たと考える。本稿で述べ尽くせなかった議論の詳細は二格相当のもの以外の無助詞名詞句も含めた枠組みの中で進展させていきたい。

#### 付記

本稿は、1996年度に学内の演習で報告した内容、並びに第31回関東日本語談話会(1997/4/19、於町屋文化センター。題目は本稿と同じ)において発表した内容をもととしている。演習や関東日本語談話会での発表に際し、貴重なコメントを下さった多くの方々に感謝申し上げる。

#### 注

- \*1 (3)の下線部の名詞句は、助詞を補おうとした場合、へ格相当のものとして解釈される可能性もあるが、本稿は以下の現象を根拠にへ格相当の無助詞名詞句の存在を認めない。
1. へ格相当とも考えられる無助詞名詞句は必ず二格相当としても解釈できる。
    - (i) 早く学校{へ／に／ $\phi$ }行かないと遅刻だよ。(「 $\phi$ 」は本文と同じく無助詞形式を表すとする)
    2. 二格相当の無助詞名詞句で、へ格相当と解釈しにくいものがある。
      - (ii) 俺さあ、昨日初めて高速バス{に／\*へ／ $\phi$ }乗ったんだけどね。
- \*2 本稿がこの箇所ですり上げた先行研究は、無助詞名詞句に関する先行研究全体の一部に過ぎない。本稿の立場から見た主要な先行研究として、この他に渡辺(1971)、Kuroda(1988)、丹羽(1989)、金水(1993)、影山(1993)、三原(1994)等があげられる。これらのうち渡辺(1971)では「統叙素材からの分析抽出が自明と意識される連用関係においてのみ(p.171)」、つまり述語との共起が予測されやすい名詞句にのみ無助詞形式で現れる可能性が実現するという、名詞句と述語との意味上の関係を基とした記述がなされており、同様の見解は丹羽(1989)でも見られる。Kuroda(1988)、金水(1993)、三原(1994)は、無助詞の主語・目的語に関して、抽象格が付与されることにより無助詞のままで名詞句の機能の認可が可能であるとしている。また影山(1993)は、「口語体では基本的に動詞の直前にある名詞句の助詞が脱落しやすい(p.56)」と端的に述べるが、これは西垣内(1992)とはほぼ同様の見解である。なお、丹羽(1989)、金水(1993)では無助詞の主題の存在が指摘されている。
- \*3 [起因]並びに(10)の[目標]の意味役割については和氣(1996)の議論を前提としている。
- \*4 この箇所ですり上げる例の文法性に関しては、1996年度に学内の学生約90名を対象にアンケートを行い、大まかな傾向を確認させていただいた。アンケートにご協力いただいた学生の方々、そしてアンケートのために貴重な時間を割いて下さった大倉浩先生、橋本修先生に感謝申し上げます。
- \*5 対象移動と対象位置変化とは、厳密には分けて捉えるべきだが、本稿のあげる各例が移動と位置変化のどちらに当てはまるかという問題については判断を留保し、双方を併記するにとどめる。
- \*6 Bruzioの一般化は、外項を持たず外項に意味役割を与えない動詞は対格を付与する能力を持たないというもので、金水(1993:194、221-222)では「能動詞のみが対格を付与できる」と端的に言いかえられている。「能動詞」は三上(1953)の用語。
- \*7 もちろんこのような説明は様々な問題を孕む。たとえばもし、「を」が対格の具現形であると限定してしまえば、[存在点]を表す無助詞名詞句の生起はBuzioの一般化に従う対格付与によって導かれ

るものではなく、滞在の主体が[動作主]として外項の位置に現れるのに伴い、[存在点]が他動詞目的語の位置に相当する内項位置に「昇格」し、統語構造上は動詞の直前の位置を獲得、このため動詞という語彙範疇によって統率されかつ隣接するため無助詞形式化が可能となる、といった説明が求められる。ただしこの場合名詞句は格を持たなければならないという「格フィルター」(金水1993、三原1994他参照)に抵触する。なお、西垣内(1992)は、二格相当の無助詞名詞句に関しては本稿(50)a.(ii)のタイプのみ(意志を持つ主体の移動の[着点]のみ)を例として示しており、かつ格を付与する語彙範疇による統率を前提として議論を行っているため、格フィルターには抵触しないとみなされていると考えられる。

また、対格の具現形は「を」のみではなく、「を」と対格とは一対一対応していないとすれば、無助詞形式化する[存在点]の名詞句は対格名詞句であり、対格の付与によって無助詞形式化が可能となっているという結論も導けるが、「を」と対格との対応関係を切り離すには、ここに挙げた二格相当の無助詞名詞句の生起という現象一つではいかにも証拠不足である。こうした議論の詳細は別の機会に委ねなければならないが、一つ言えることは、対格の付与を前提あるいは条件とした無助詞形式化を認めるにしろ認めないにしろ、無助詞形式で現れる[存在点]の名詞句はおそらく内項の地位を持っているだろうということである。

- \*8 (48)(49)のような例について、文法性に若干の問題があるとする話者もいる。このことが1.2.でとりあげた「ガ格ーヲ格相当ー二格相当」の三項型の文に許容度のゆれが生じる理由と同根の現象であれば、2.節(50)で本稿の示す二格相当無助詞名詞句の分類の一つの傍証となるところであるが、現状においてははっきりしたことは分からない。
- \*9 この「動詞の直前という統語環境」という記述は、一見二格相当無助詞名詞句の生起条件を述べているように思われるかもしれない。しかし、なぜ動詞の直前ならば名詞句が無助詞形式のまま生起できるのかという最も重要な疑問には答えておらず、この箇所の記述をもって生起条件とすることはできない。
- \*10 三宅(1996b)の示す[経路]の構文、並びにその統語構造は以下の通りである。最上位のVPの指定部が外項、[動作主]の生起する位置であるがそれを欠く。したがって対格を標示することはBurzioの一般化からすれば例外的な現象ということになる。

(i) a. 涙が頬をつたった。

b. [VP [V [VP 涙が [V 頬をつた(う)] ] V ] ]

- \*11 ここでは「見舞う」「挨拶する」の[動作主]を表す(外)項が生起せず、主文の[動作主]と一致することについては不問に付す。
- \*12 (57)(58)のような、「無助詞」形式の目的を表す要素が項をとるような例に関しては、関西方言話者の方から許容度に問題が生じることをご指摘いただいた。十数名の関東方言話者にこうした例を確認したところ、問題なく許容されるとのことであり、文法性の判断に関して明らかな方言差が見られる。こうした方言差と、それが生じる理由については今後の課題となる。

## 参考文献

- 尾上圭介(1996)「主語にハもガも使えない文について」、日本認知科学会13回大会ワークショップ「日本語の助詞の有無をめぐって」ハンドアウト、<http://www.sccs.chukyo-u.ac.jp/jcss/CONFs/onoe.html>
- 影山太郎(1993)『文法と語形成』、ひつじ書房

- 金水 敏(1993)「古典語のヲについて」、『日本語の格をめぐって』、仁田義雄編、くろしお出版
- 金水 敏(1996)「歴史的に見た「格助詞」の機能」、日本認知科学会13回大会ワークショップ「日本語の助詞の有無をめぐって」ハンドアウト、<http://www.sccs.chukyo-u.ac.jp/jcss/CONFs/kinsui.html>
- 西垣内泰介(1992)「日本語の非対格構文と $\theta$ 理論」、『大阪大学言語文化学』1、大阪大学言語文化学会
- 丹羽哲也(1989)「無助詞格の機能」、『国語国文』58-10、京都大学文学部国語国文学研究室
- 丸山直子(1995)「話し言葉における無助詞格成分の格」、『計量国語学』19-8、計量国語学会
- 丸山直子(1996a)「助詞の脱落現象」、『月刊言語』25-1、大修館書店
- 丸山直子(1996b)「話し言葉における無助詞格成分」、日本認知科学会13回大会ワークショップ「日本語の助詞の有無をめぐって」ハンドアウト、<http://www.sccs.chukyo-u.ac.jp/jcss/CONFs/maruyama.html>
- 三上 章(1953)『現代語法序説』刀江書院 (1972年くろしお出版により復刊)
- 三原健一(1994)『日本語の統語構造』—生成文法理論とその応用—、松柏社
- 三宅知宏(1996a)「日本語の受益構文について」、『国語学』186
- 三宅知宏(1996b)「日本語の移動動詞の対格標示について」、『言語研究』110
- 村木新次郎(1991)『日本語動詞の諸相』、ひつじ書房
- 渡辺 実(1971)『国語構文論』、塙書房
- 和氣愛仁(1996)「「に」の機能」、『筑波日本語研究』創刊号、筑波大学文芸・言語研究科日本語学研究室
- Burzio, Luigi(1986) *Italian Syntax: A Government-Binding Approach*, Studies in Natural Language and Linguistic Theory 1, D.Reidel Publishing Company.
- Kuroda, S.-Y.(1988) "Whether We Agree or Not: A Comparative Syntax of English and Japanese." Reprinted in Kuroda(1992).
- Kuroda, S.-Y. (1992) *Japanese Syntax and Semantics: Collected Papers*, Studies in Natural Language and Linguistic Theory 27, Kluwer Academic Publishers.
- Larson, Richard K. (1988) "On the Double Object Construction," *Linguistic Inquiry* 19-3.

(1997年8月31日 受理)